

漫画版「デビルマン」から考察する現代の自己犠牲について

— いじめ問題における自己犠牲的行為の評価への応用 —

上 松 幸 一

要 旨

本研究では、漫画版デビルマンのストーリーから見る自己犠牲についての検討を行った。主人公である不動明は、その漫画の中で、自らがデーモン(悪魔)と合体し、人間としての生き方を捨て、デーモンとなって人類を守ろうとする自己犠牲を示している。その行為について、特に道徳的・倫理的観点と心理学的観点の2つの視点から、先行研究をもとに整理した。

その結果、自己犠牲的行為は、①メリットの最大化志向と行為の両価性、②行為の持つ価値の不確定性、③行為の被強制性・受動性、および葛藤状況の存在、④行為の長期的視点と短期的視点、および行為の過剰適応性の可能性、⑤メリットを受ける対象者の違い、という5点に集約された。特に③の「行為の被強制性・受動性、および葛藤状況の存在」に関して、これまで多くの先行研究で前提となっていた自己犠牲的行為の、「主体性や自己の意志」に関する疑問点が取り上げられた。

また整理された内容をもとに、現代のいじめ問題において起こる可能性のある自己犠牲について検討を行った。本稿では現代社会でよく耳にする架空のいじめ事例に沿って、どのように自己犠牲的行為を評価すべきかを議論した。自己犠牲的行為は単に「美徳」だと評価することは拙速であり、素晴らしい行為と評価するためには、①その行為者周辺の安定した生活環境と個人の人格の安定性、②リスクを引き受ける精神的なタフさ、③メリットとデメリットのバランスを検討できる判断力、④行為の価値の不確定性の理解、というものを持ち合わせていなければならない。そうでなければ行為者自身がリスクに晒されたり、周囲から批判を受けたりする可能性がある。またその行動を周囲が受容する素地を持っているのかどうかも、行為を成す上で重要な要素となることが議論された。

1. 漫画版デビルマンとアニメ版デビルマンについて

「デビルマン」という名前は、一度は聞いたことがあるかもしれない。デビルマンは昭和42年にテレビ放映されたアニメ作品であり、初回放映から50年以上が経過している。デビルマンはテレビアニメだけでなく、同時期に週刊少年マガジン(講談社)で連載されており、今日でいうところの“メディアミックス”の形で認知度を高めていった。アニメ版デビルマン(以降、アニメ版)は、悪魔の一員であるデビルマンがデーモン(悪魔)族を裏切り、デーモンの魔手から人間界を守るという「悪魔(デビルマン)対悪魔(デーモン族)」の構図で、勧善懲悪を基本とした子ども向け番組の体裁が採用されている(永井原作, 2002)。しかし1972年から1973年に週刊少年マガジンで連載された漫画版デビルマン(永井・ダイナミックプロ, 1994)は、それとは全く異なっており(以降、漫画版)、青年や成人を対象とすべき内容であった。アニメ版と漫画版はそもそも別物であることを原作者の永井も述べており(永井&ダイナミックプロ, 1997)、内容は暴力や性の描写が多く、人類滅亡へと突き進むストーリーは救いのない結末となっている。

漫画版は1年程度の連載期間で、単行本としても5冊と非常に短いストーリーである。しかし漫画版は「完全復刻版(永井・ダイナミックプロ, 1994)」「講談社漫画文庫版(文庫版)」「豪華愛蔵版(永井&ダイナミックプロ, 1987)」など形を変え、繰り返し再販されている。最近では2018年に「デビルマン The First(1), (2), (3)」(永井豪とダイナミックプロ)が再販されている。また漫画版から派生する「AMON デビルマン黙示録(竹下監督・永井原作, 2002)」「ネオデビルマン(永井, 2012)」「デビルマンレディ(永井, 1997)」「デビルマンサーガ(永井, 2015)」を代表とする、様々な漫画やアニメが新たに生まれている。特に「ネオデビルマン」は、原作者自身が直接漫画を描いておらず、彼に影響を受けた有名漫画家らがストーリーも含めて新たに描いた作品である。デビルマンがいかに多くの漫画家

に影響を与えた作品であるかということが理解できよう。その他、漫画版のストーリーをそのまま映像化しようとした「デビルマン OVA コレクション(飯田監督・永井原作, 2003)」や「Devilman Cry Baby(湯浅監督・永井原作, 2018)」といった作品もある。前者は原作に忠実に映像化されているものの、諸事情により映像化が中断され、後半のストーリー展開は映像ではなく CD ブックとなった。後者については原作の時代背景もあり、現代風にかなりアレンジが加えられている。その結果、映像化された内容に賛否を生む事になるが、DEVILMAN crybaby は、原作のストーリーを最後まで映像化し切った点が評価のポイントにもなっている。以上のように50年以上経過してもなお、コア層を中心に人気が続いている漫画であるが、救いようのない結末を迎えるストーリーの漫画版が、このように息長く人々の関心を引くのは何故だろうか。まずは漫画版のストーリーを整理したい。

2. 漫画版デビルマンのストーリー

1) 悪魔合体パート

時代は昭和40年代の日本だが、場所は詳しく示されていない。学生服をきているが中学生なのか高校生なのかも不明である。とある学校に在籍する、気が優しく、泣き虫で大人しい男子生徒の「不動明(以下、明)」が主人公である。そこには明の居候先の牧村家の長女である「牧村美樹(以下、美樹)」も在籍している。美樹は明とは性格が異なり、活発で優しく男子からも人気があり、自分の思ったことを率直に表現するタイプであった。ある放課後、二人が待ち合わせて自宅に帰ろうとしたところ、不良たちに絡まれる。そこに明の幼馴染である「飛鳥了(以下、了)」がやってきて、了は「明に用事がある」と、改造した猟銃で不良たちを脅して退散させる。明は了が運転する車の乗り込み、道すがら、了から「用事」についての詳細を聞かされる。その内容とは「氷河期に氷の中に閉じ込められていたデーモンが、氷を破ってこの世界に現れ始めた」というものであった。了



図1 明がデーモンと合体した直後
(講談社漫画文庫デビルマン①より)

は明に対してデーモンと合体し、デーモンと戦う力を得て、デーモンと戦ってほしいと懇願される。明は人間としての人生に終止符を打ち、デーモンと合体することで人間を守るための力を手に入れることに同意する。しかし人間の意識を

保ちながらデーモンの力を手に入れるには、「純粋で正義を愛する心を持った若者でなければならない」ことを了から伝えられる。その後、紆余曲折があり、飛鳥邸の地下にある低属なデーモンでは侵入することができない鋼鉄で覆われた地下室へと向かう。広い地下室では、大勢のヒッピーが理性を捨てて快楽に興じていた。了曰く「彼らと一緒にの方が理性を捨てやすい」と。デーモンと合体する際にはもう一つの条件として「デーモンが嫌う人間の理性を捨てて本能で動く」必要があった。

その後、レベルの高いデーモンが瞬間移動で鋼鉄に覆われた地下室に侵入し、その恐怖で明は本能で逃げ回っている際にデーモンと合体し(図1)、デビルマンとなる。周囲にいたヒッピーたちもデーモンと合体するが、「純粋で正義を愛する心を持つ若者」ではなく、すぐに精神をデーモンにのっとりられる。デビルマンはデーモンになってしまったヒッピーたちを皆殺しにして、唯一生き残っていた了を救出し、その場を脱出する。

2) 悪魔討伐パート

その後、明と了は、街に巢食うデーモンを見つけ出し、退治する「デーモンハンター」としての活動を開始する。デーモンは世界に住む人間を捕食していたが、人間にその存在を知られることを避ける行動をとっていた。また明も自分がデビルマンであることを隠し、了と共にデーモンハンター

を続けていた。そのような中、妖鳥シレーヌはその仲間と共に牧村家を急襲し、明を人間の姿のまま、鋭い爪で捕捉する。シレーヌの爪は、明の体内機能を狂わせ、明は悪魔本来の姿に戻ることができなかった。しかし明の窮地を察知し、了はシレーヌをショットガンで狙い撃ち、明はシレーヌの爪から脱出する。ようやくデビルマンに変身した明は、シレーヌと血みどろの戦いを繰り広げ、ぎりぎりの勝利を掴む(図2)。



図2 シレーヌと死闘を繰り広げるデビルマン
(講談社漫画文庫デビルマン②より)

また、明は親戚の“さっちゃん”をジンメン(亀の姿をしたデーモン)に捕食されてしまうこともあった。デビルマンは、半ば生きた状態で亀の甲羅に浮き上がったさっちゃんの顔を、ジンメンの甲羅ごと貫いて退治するという過酷な経験する。

3) 世界滅亡パート

しかし徐々にデーモンの存在が世の中に知られる事になる。人間はその存在への恐怖によって、さまざまな防衛のための装備を投入していく。しかしデーモンは人間に対して、より強い恐怖を与えるために、人間への無差別合体を行い、人間の殺害を繰り返す。その「人間が突如悪魔になって死んでしまう」という現象について、著名な学者は「人間の悪き心が、人間をデーモンにする」という誤った見解を導き出してしまう。その発表に



図3 悪魔特別捜査隊
(講談社漫画文庫デビルマン④より)



図4 戦いの後の明とサタン(了)
(講談社漫画文庫デビルマン⑤より)

人間は踊らされ、人間の中に潜むデーモンを退治しようと、悪魔特別捜査隊が組織されることになる(図3)。

そして人間の中にありもしないデーモンの姿を見出し、デーモン狩りと称して人間を捕え、殺していく。また多くの人間は周囲の人間がデーモンではないかと疑心暗鬼に駆られ、人が人を裁くという行為に至ってしまう。このことにより、明の愛する美樹は、隣人たちに魔女として殺害されてしまう。このような人間同士がいがみ合い、殺し合うシナリオは、悪魔神サタンが作ったシナリオであった。実は、サタンは自身の記憶を消し、了になりすまして人間界に忍び込んでいたのである。そこで人間を観察し、その弱さを知り、恐怖を煽ることが最も人類の滅亡への近道だと知る。しかしデーモンの人間に対する無差別合体が、「人間の心

を持ち、デーモンの力を持つデビルマン」を数多く生み出したことは誤算でもあった。明は多くのデビルマンと共に、デーモンとの戦いに進んでいくが、人類は自身の弱さのために核兵器のボタンを押し、滅亡へと進む。残ったのは、サタンが率いるデーモン族と、明の率いるデビルマン軍団だけであった。この両者の最終決戦により、最期は明がサタンに看取られ、永い眠りにつくことになる(図4)。

3. 漫画版デビルマンの魅力

山田(1997)は、漫画版の魅力について、そのストーリー構成の素晴らしさやキャラクターの魅力などを指摘している。一方で子どもの視点により、人間の本質である「性と暴力」が描かれていることなども挙げている。また高田(2004)は漫画版の構造を分析した研究を行っており、ストーリーの重要な点を列挙し、精神分析的視点で考察を加えている。その他、「完全保存版デビルマン大解剖(永井・ダイナミックプロ監修, 2015)」では、「主人公が人から忌み嫌われるデーモンとなり、それでも陰で人々を守らなければならない報われなさや主人公の苦悩などが描かれており、その描写がこの作品をより魅力的にしている」と指摘している。また蜂巢(1993)や浦山珠夫と光輝堂(1998)も、デビルマンの魅力をその著書で紹介しており、多くの解説を加えている。特に蜂巢は、漫画版で描かれている「悪魔狩り」を中世ヨーロッパの「魔女狩り」とリンクさせながら幾つかの考察を加えている。そのうちの一つに「嫉みの感情」というものがあるという。漫画版では明が居候している牧村家が、「悪魔狩り」の対象となった。悪魔狩りとは「人間になりすましたデーモンが人間の姿になって潜んでおり、そのデーモンを見つけ出し殺すこと」である。牧村家は大きな屋敷を構え、中流階級以上の裕福な家庭であったため、周囲からの「嫉み」によって悪魔狩りの対象として矛先が向けられた可能性がある」と指摘している。その他にも「デビルマン解体新書(赤星ら編, 1999)」では、神から虐げられた

悪魔の視点に触れ、人が考える正義と悪の境界の曖昧さが描かれていることに面白味があると指摘している。この作品は、人の心理や葛藤といった、人間の本质を巧みに描写していることがその魅力の重要な要素となっていると言えよう。

4. 自己犠牲的精神の浸透

永井&ダイナミックプロ(2019)は、明とデーモンとの合体を「若者の武装化」を象徴していると述べており、漫画版の根底に反戦への思いが含まれていることを示唆している。しかし明が「人間としての全て」を捨て、デーモンの体を手に入れることで自身を武装化した理由は、身近な人たちや人類をデーモンから守るためであった。これは「自己犠牲的行為のひとつ」と理解でき、それが我々の心を惹きつける魅力の一つでもあろう。結果として、デビルマンである明は、人間としての過去を捨て、デーモンの体を持っていることを隠蔽しながら、生死をかけた戦いを続けることを強制される。他者の幸福と引き換えに、一身に不幸を背負うことによる損失はあまりにも大きい。

しかし我が国において「自己犠牲」を描いた物語はデビルマンだけではない。例えば1703年(元禄十五年)に起こった赤穂事件に基づき、人形浄瑠璃や歌舞伎狂言において1748年(寛延元年)に初めて上演された「仮名手本忠臣蔵」が挙げられよう(廣野, 2015)。忠臣蔵は主君の無念のために切腹を覚悟で仇討ちに向かう浪士の物語である。江戸時代から日本人の心に訴えかける美談として少しずつ形を変えながら、現代まで語り継がれる非常に息の長い「忠義の物語」と言えよう。「忠義(忠誠)」に関する説明は、武士道(新渡戸著・岬訳, 2005)の中において行われている。新渡戸が物語で示す忠義は、「主君のために我が子の命を差し出す」というものであり、必ずしも自分自身を差し出す内容ではない。しかし「我が子の幸せは家族の幸せであり、個人の幸せ」と捉えられており、それを捨ててでも主君に

仕えるという考えは、個人より公を重んじる精神である。個人の幸せを捨ててでも守る対象が社会全体なのか、それとも特定個人なのかという違いはあるが、忠義の精神は自己犠牲の精神と同義的と考えられる。そこで本稿では「忠誠≒自己犠牲」と定義しておきたい。

その他に、国民的アニメである「それいけ！アンパンマン(やなせ, 1975)」のような幼児向けアニメにおいても、自己犠牲的描写の傾向は顕著である。アンパンマンは悪の代表であるバイキンマンの悪行を指摘し、抵抗するバイキンマンを危険も顧みずに退治する。また自分の頭である「アンパン」を切り分け、お腹の減った人に分け与える。結果的に頭部の一部が欠損することで自身が弱り、バイキンマンにつけ入る隙を与えてしまう。これらの行動も自己犠牲的行為と言えらるだろう。その他にも「ドラゴンボール(鳥山, 1994)」のベジータ、「ワンピース(尾田, 2010)」のエース、「鬼滅の刃(吾峠, 2017)」の煉獄杏寿郎など、アニメーションや物語で自己犠牲を描いたものは枚挙に遑がない。我が国では昔から広く、そして幼少期から自己犠牲の精神・考え方が浸透する素地があるのかもしれない。またそこでは「正しい行いを成すための手段」としての側面が強調されている。それらは美德とされ、理想的な生き方を示すものとして我々の身近に存在する。

5. 漫画デビルマンから自己犠牲を考える

それでは、デビルマンに描かれている自己犠牲とはどのようなものであろうか。そもそも漫画版デビルマンに関する文献において、明の自己犠牲に焦点を当てて解説されたものは思いのほか少ない。そこでその本質について、道徳的・倫理的視点と心理的視点を中心に検討してことを第1の目的とする。その際、前項でも述べた通り、本論では忠誠(忠義)は自己犠牲と同義として議論を進めていくこととする。また第1の結果を通して、現代における自己犠牲的行為をどのように考えればよいのかを、架空のいじ

め事例をもとに検討することを第2の目的とする。

1) 倫理・道徳的視点を中心に

自己犠牲について田村(1997)は、倫理学の観点から「犠牲」を「何者かの身代わりとして被害をうけることを含むが、そのこと自体が崇高な行為である」と述べている。また田村(2010)は、行為者が「その場面で期待される行為のシナリオを察知し、そのシナリオにこめられた他人の意図に沿って自らの身体を意図的に動かし、自己犠牲的行為を役柄上の身振りとして遂行する」ことが自己犠牲の本質だと説明する。他に梅垣・友添(2002)は、キリスト教世界における「忠誠」の考え方に関する指摘をしており、「そこで要求される行為は、決して抑圧的、屈辱的な意識状態で行われるのではなく、むしろ個人の自由な意思決定に基づいて主体的に行われる行為である」と述べている。

この前提に立った際、不動明が人間としての一生を捨て、デーモンの体を手にして人類を守ろうとした行為は、主体的な意思決定によって選択された崇高な利他的行為と捉えられ、それ自体、肯定されるべき行為ということが出来る。また明には、了からのデーモン合体の要請を受け、「うまくいけば化け物となり、死ぬまで悪魔と戦い殺し合わねばならぬ阿修羅地獄！まずくなったら化け物になったわが身を焼き殺さねばならぬ」という苦しい状況においても、自ら歩みを進め、社会正義を遂行する精神の強さを感じるものである。そのため社会正義を貫こうとする「絶対的に正しい行為」に異を唱えることは、無粋なことと見なされる可能性があるだろう。

しかしながら「絶対的に正しい行為」というものが存在するのかという疑問が湧く。川谷(2007)は、ニーチェの利他主義に対する批判を糸口とし、自己犠牲に関する論考を行っている。そこで自己犠牲は周囲に有益であるために「良い」ものとされ、「美徳」と表現されている。しかし反面、「私的には有害なもの」であって自己犠牲と個人の究極的利益は背反すること

を指摘する。よって自己犠牲は「人間をダメにする」ものでありながら、社会の「必要悪」だと述べている。明は人類を守ろうとするあまり、自己破滅的で自身に有害な選択を行っていたと言える。そして先々の自身のケアが全く考慮されず、一人の犠牲のもとに全体が利益を享受するための「必要悪」として、その行為が黙認されていた可能性がある。宮内(2010)もキャロル・ギリガン(1986)の著書を紹介し、思いやりの倫理発達過程において、非利己的価値を掲げる自己犠牲は、自身をケアの対象に組み入れていないことを指摘し、内包される課題があると述べている。しかも明とデーモンとの合体は、必ずしも人類を守ることを保障するものではない。デーモンとの戦いに敗れ、道半ばで脱落する可能性も十分考えられる、無謀な行為でもある。このストーリーでは結果として人類が絶滅に至っており、明として望む結果を得ることができなかった。このことから明の行動はそもそも意味があったのかという疑問が出て不思議ではない。

また自己を犠牲にして守ろうとした人間に、その価値があるかという点も押さえる必要があるだろう。新渡戸・岬(2005)は、自己を犠牲にしても忠誠を示す「対象」の性質によっては、軽蔑され、美德と考えられないこともあると指摘する。忠誠を示す対象、つまり自己犠牲的行為により発生する利益を享受する対象は、それに見合うだけの正しさや善良さを持ち合わせていなければならない。よって利益を享受する対象が不誠実であり、悪である場合、全ての利他的行為は、行為者にとって自己犠牲的ではあるものの、それは美德と評価されたり、正義の行為と評価されたりするものではないということになる。漫画版では人間を拷問し、デーモンをあぶり出す執行官らしき3人の手により、居候をしていた牧村家のおじさん、おばさんが殺害されてしまう。これは人間が自己防衛のために他者をスケープゴートにし、殺害してしまう卑劣で、しかし非常に人間的な行為とも考えられる。明はその3人の執行官に対し「これが！これが！おれが身を捨ててまで守ろうとした人間の正体か！地獄におちろ人間ども！」と叫び、彼らを焼き殺してしまう。明は当初、人間は自己犠牲を払うに値する存在

として認識していたと考えられる。しかしこの発言からは明がデーモンと合体する当初とは異なり、人間を守る価値のないものと評価している。デーモンから絶えず恐怖を植え付けられる殺伐とした環境下で人間の価値は変化してしまい、明の行為の意味は根底から覆されることになる。結果的に明が考えていた「人間の価値」は状況に依存し、「客観的で、守るに値する不変的価値」がそもそも存在しなかったことになる。彼の行為は「行為者の断片的、主観的価値判断によって行われた倫理的・道徳的に曖昧な行為」であったと言えるかもしれない。

2) 心理学的視点を中心に

次に心理的な視点から検討したい。杉山(2017)は、女子大学生に対して親の扶養に対する考え方の事例を挙げ、「自己犠牲」や「自己優先」の重要度、満足度、共感度、義務感の程度を検討している。そこでは自己犠牲を「自己を優先せず、他者を優先する行為」と定義しており、田村の定義とずれるものではない。しかし行為自体の価値に対して、「美德である」「崇高である」といった評価を含まないのが大きな違いと言えるだろう。また心理学の領域では、自己犠牲的行為に、積極的に「自己の利益を確保」しようとする側面があることを示唆する研究がある。安藤(2002)の研究では、環境ボランティアへの参加が自己犠牲的行為であるという前提のもと、環境運動に参加する20名のコアメンバーに聞き取りを行い、運動への参加のメリットについて調査を行っている。安藤は、環境運動に参加することによって獲得されるものに、「友人・ネットワークの広がり」「自己の有能感」「対処有効性」「活動に関する技能」の4つのカテゴリーがあると示唆している。このことから、自己犠牲とは杉山が定義する「自己を優先しない」不合理なものではなく、複数の選択肢の中から選ばれた、自身の利益にもかなう合理的な行為だと考えられる。

また山本・池上(2020)らは、自己犠牲を伴う援助を行う者に対し、第三者の特性によっては援助者の自己犠牲の程度が大きければ大きいほど、そ

の行為が利己的に見えてしまう場合があることを指摘している。この研究は周囲からその行為がどのように評価されるのかについて指摘している点で非常に重要な研究と考えられる。この研究結果を考慮すると、明の行為はその自己犠牲の程度の大きさ故に、非常に利己的だと評価する者が出てくる可能性がある。しかしながら漫画版では、人類全体が当事者である。よってこの物語において第三者は存在しないため、明の行為を利己的と見る者はいないことになるだろう。

以上のことから自己犠牲とは、「自身に不利益な側面を含むが、他者と自己の双方に利益をもたらそうとする合理的行為であり、表層的には、周囲によって他者利益の方が大きく評価されるもの」と整理できるかもしれない。

しかし一方で、自己犠牲的行為が、自身にとっての不利益以上に、他者利益と自己の利益の合計が大きくならなければ、行動に移す意義はない。よって利益の程度を最大化する必要がある。この視点で明の行為について考えた場合、デーモン的人类への攻撃に対する「リスク回避」という非常に大きなメリットを取るために、自身がその防御壁となる小さなデメリットを取ったという理解が可能である。とはいえ、防御壁になるのは明でなくても良かった。第三者にデビルマンになってもらい、人類を守ってもらうという選択も可能であったが、明はそれを選択しなかった。おそらくその大きな理由に、「友人である了から依頼された」ことが挙げられよう。サバトが繰り広げられる部屋に入る前に、自らの覚悟について涙を流して苦渋の決断を言葉にする場面からも、明が決して積極的に望んだ道ではないことは理解できる。このような心理的な判断状態を理解するために、Lewin, K の心理的葛藤の型(東ら, 1991)は重要な視点を提供する。可能であれば双方の選択を回避したいという状況の中で、一方を選択せざるを得ず、その選択が結果的に自己犠牲となる、「回避-回避葛藤状況における結果としての自己犠牲」と言えるのではないだろうか。

また、不動明の自己犠牲的行為自体が「自身のこれからの人生の豊か

さ」というメリットを確保する行為であった可能性を検討したい。明は物語の終盤において、美樹が生きることのできる世界を維持することが、唯一の希望であると気づく。これは明自身が以前から持っていた美樹に対する情愛と考えられ、物語の終盤になってようやく言語化される。この考え方においては、愛の対象である美樹との関係性を維持することが優先的な目的となる。それはその後の明自身の人生をより豊かにするという、自身の欲求を満たすためのエゴと言い換えることも可能であろう。あくまでも美樹以外の人間の安全は、二次的なものに過ぎなかったとも言える。デーモンと合体するという回避したい行為と、デビルマンになることで美樹を守ることができるという接近したい行為の中で生まれる自己犠牲的選択であるため、「接近－回避葛藤状況における結果としての自己犠牲」と捉えることになる。

最後に身近な人物からの承認欲求を満たし、他者から否定されることへの不安回避のための過剰適応行為の可能性についてである。他者とはもちろん了である。了は明にデーモンの存在を知るに至った壮絶な経緯を伝え、明にデビルマンとなってデーモンと戦うことを求める。そのような状況に一人身を置き戦っている了の要請を拒否すれば、了の信頼を失ってしまうのではないかと考えるのは自然なことであろう。齊藤ら(2012)は、見捨てられ不安尺度の作成を試みているが、その際、見捨てられ不安を「重要で身近な他者に承認される自信がなく、自身の価値観をありのままに主張すると、重要で身近な他者から嫌われるのではないかと不安から自己犠牲的な認知・行動を過剰に選択する心理傾向」と定義している。つまり自己犠牲的な認知・行動を過剰に選択することは、不安を解消できるというメリットをとるための方法論であると考えられる。回避したいデーモンとの合体と、デビルマンになりたくはないが、了から拒絶されることは回避したいという思いによる「回避－回避葛藤状況の自己犠牲」と言えるかもしれない。しかしながらこの自己犠牲は、2番目の「接近－回避状況における結果としての自己犠牲」とは異なり、長期的視野に立って選択された

ものとは異なり、「今、現在」からの不安を回避するその場限りの行為であり、質的な違いがあると考えられる。

ここで明が、了からの信頼を失うことを恐れている可能性を、もう少し議論したい。明が齊藤らの示唆のように、見捨てられ不安からの回避としての自己犠牲的行為を選択したのであれば、明の了に対する確固たる信頼感が構築されていなかった可能性がある。これは単に明と了との二者関係における信頼感だけではないかもしれない。明の性格としての「優しさ」は、一方で自分の考えや主張を周囲に明確に伝えることができないことの裏返しとも考えられる。よって明は愛着形成(J.ボウルビイ, 1981)の課題を抱えていたという疑問も成り立つ。明の両親は海外赴任のために親元を離れ、牧村夫妻の家で居候をしている。この経緯について原作では触れられていないが、思春期の子どもにとって、両親との離れ離れの生活は非常に不安で辛い経験である。両親の都合により、家族バラバラでの生活を強いられることへの怒りや寂しさを抱えていても不思議ではない。親元から早々に切り離されてしまった明だからこそ、了との精神的離別は耐え難く、分離による不安を回避するため自己犠牲的行為を選択したという見方を否定できるだけの根拠はないと思われる。

3) 自己犠牲的行為の意義に対する疑問点と総括

以上のように、デビルマンである不動明の自己犠牲的行為を倫理・道徳的視点、および心理学的視点から総合的に概観すると、「主体性」と「自己の意志」が、その行為の前提とされているものの、これには大きな疑問を感じる。

人間には基本的に快刺激を欲し、不快刺激を排除する脳のメカニズムがあることが知られている。そのメカニズムに抗い、自身に不快となる行為を自身に要求すれば、その納得に足る合理的意味を付与しなければ認知的不協和を起し、ストレス状況に陥る。明の場合は、人間を捨てるという不快な行為を選択するための「合理的意義づけ」を行うことにより、快の

選択を抑え込もうとする一連のプロセスが存在したように思われた。また自由な選択肢がほとんど用意されず、暗に Better な選択肢であると呈示されている時点で、明確な主体性のある行為とは言いがたい。確かに最終的に選択をした明自身の意志を否定するものではない。しかし明がデビルマンになることを了から求められている状況に自由な選択肢はなく、デビルマンになることが暗黙のうちに強制されている主体性剥奪の状況とも言える。自己犠牲的行為が必ずしも行為者の主体性が発揮されたものではないとすると、その行為の価値も大きく異なってくる可能性があるだろう。

以上のことから、漫画版デビルマンから検討された「自己犠牲」とは、以下の5点に整理することができると考えられる。

① メリットの最大化志向と行為の両価性

表層的には自分を犠牲にした利他主義的で「崇高と見える行為」であるが、そこには行為者自身が抱えるデメリットとメリットを比較し、メリットを最大化する利己的行為という側面がある。そのため個人にとっては「有害な行為」でありながら、「有益な行為」でもあるという両価性を持つ。

② 行為の持つ価値の不確定性

確定的な価値を持たないものに対して、ある瞬間において主観的に判断された価値を付加することで行為の合理性が担保される。そのため環境の変化に応じて行為の意味や価値が大きく変わってしまう。またその自己犠牲的行為の正当性は、その行為を行った上で、周囲の状況を見なければ確定できない。

③ 行為の被強制性・受動性、および葛藤状況の存在

その行為自体は必ずしも主体的な行為とは言えず、周囲から暗黙の圧力によって特定の選択肢に誘導され、「回避－回避葛藤」および「接近－回避葛藤」状況の中で判断を求められる「暗黙のうちに強制された受動的行為」という側面を持つ。

④ 行為の長期的視点と短期的視点、および行為の過剰適応性の可能性

自己犠牲的行為には、長期的な視点に立ったものと、その瞬間の不快状況を回避するための短期的視点に立ったものがある。後者に関しては他者への信頼感の乏しさが故の過剰適応行為という可能性があり、行為者の愛着形成課題が潜んでいることが考えられる。

⑤ メリットを受ける対象者の違い

自己犠牲的行為によるメリットは、特定個人に向けられる場合もあれば不特定多数に向けられる場合もある。または双方の可能性もある。

以上のことから、自己犠牲が一般的に認識されている「自分を犠牲にして他者の利益を優先する」といった単純な構造ではないと考えられた。

6. 現代のいじめ問題における自己犠牲的行為を考える

では、漫画版デビルマンで検討した自己犠牲の考え方を、我々が抱える今日の社会的問題へ当てはめた場合、どのように応用して考えれば良いのだろうか。そこで本稿では、よく耳にするような「いじめ問題」に関する架空事例をもとに検討することとしたい。その際、本論は自己犠牲的行為についての検討であり、「いじめ行為」自体の善悪の議論は行わないこととする。

1) 架空事例

中学2年生のBには仲の良い友人はAしかおらず、しかも周囲からいじめを受けていた。Bには自分を庇ってくれる友人はおらず、AはBの様子をずっと心配していた。Aはいじめ被害の矛先が自分になる可能性があるため、関わることに躊躇していたが、決意を固め、担任の先生にその状況を報告してBを助けた。しかしその後、担任の先生にAがいじめ行為を報告したことが他の児童に明るみになってしまい、いじめの対象はBからA

に移ってしまった。その際、BはAをいじめる側に回ってしまった。

2) 議 論

この架空事例からAの自己犠牲的行為について、5つの視点から整理する。

① メリットの最大化志向と行為の両価性について

Aの行為は一般論的には崇高な自己犠牲的な行為と見ることができる。しかしこの行為を遂行する際のデメリットとして、「いじめ対象がBからAに移ること」が考えられる。逆にメリットは「Bという特定個人を守り、信頼を得ること、他のクラスメートや担任という多人数からの賞賛を得ること」、もしくは「正義を貫くことによる自己満足」となる。そこでAにとってBを助けることは、デメリットとメリットを天秤にかけてメリットが大きいものと判断したことになる。

② 行為の価値の不確定性

Bは、Aがリスクを取ってまで救う意味のある人物かという点が疑問視される。Bの置かれている立場を考えれば、いじめる側に回ることが自身の守りにつながることは理解可能である。ただAからは、Bの行為は裏切り行為となる。これは自己犠牲的行為が開始される際には想定できず、その行為は意味のあるものとして考えられていた。しかし結果的に、Bの裏切り行為という不誠実さのため、Bは自己を犠牲にしてまで守る価値があったとは言えず、当初の思惑とは異なり、Aの行為は、Bの堕落を助長し、人としての価値を損なわせるものとなる。自己犠牲的行為の価値は、Bを助けようとする段階では不確定であり、Bの裏切りにより自己犠牲的行為に大きな価値がなかったことが確定することになる。

③ 行為の被強制性・受動性による葛藤状況

Bがいじめられており、Bを助ける者が他にいない状況があった。そのためいじめ行為に何らかの対応ができるのはAだけあった。そこでAは「いじめの状況を放置・傍観するか、自分が関与するか」といった選択を

迫られ、行動を余儀なくされることになる。かつ、「正しさ」、「Bとの関係性」という暗黙の強制力により選択肢が制限された可能性も否定できない。そこには主体性の名の下、半ば強制的に自己犠牲的行為を強いられ、追いこまれるという形で関与せざるを得ない状況だった可能性がある。

④ 長期的視点と短期的視点、および行為の過剰適応性

Aの行為は、Bとの今後の関係性やBの安全性などを考慮した行為と考えれば長期的視点に立った行動であった。しかし、そこで助けなければ「Bに嫌われるのでは」という情緒的反応で行為に至ったのであれば、Bとの分離による不安を回避するための短期的な視点による情緒的行為ということになる。その行為の過剰適応性が疑われる。

⑤ メリットの対象方向

Aの行為は、最終的にBに対してのみメリットを提供するものであった。しかし仮にいじめの矛先がAになることなく問題が解決していれば、そのクラス全体に対しても、「いじめによる不安定要素をクラスから取り除く」というメリットが提供できる可能性があった。

3) まとめ

これらの議論から、現代のいじめ事象に対する関わり方の一つとしての自己犠牲的行為は、表層的な行為でその価値を語ることに大きな意味がないことが理解できる。また行為によるメリットは、その対象や内容が状況に応じて大きく変化することを知っておく必要がある。

つまり、①他者との間に情緒的な信頼感が形成可能という人格の安定性、およびそれを育てた家庭環境の存在、②自身が正義と考えることを成すためにリスクを引き受ける精神の強さと主体性、③リスクとメリットのバランスを冷静に評価し、メリットを最大化するための判断力、④行為の価値の不確定性を認識して、より価値の高い結果を導くための下準備、といったものが揃い、肯定的な結果を引き出すことで初めてAの自己犠牲は「崇高で美德」なものとして周囲から肯定的に評価される。状況に流される形

で自己犠牲的行為を行ったとしても、それは「行為者の安全性」や「行為の意義」を担保できるかは疑問であり、必ずしも褒められる行為ではないということになってしまう。そのことから安易に自己犠牲を賛美し、その行為を行う人間は素晴らしという雰囲気を作り出す風潮は、必ずしも正しいとは思えない。

しかし「自己犠牲」がどうして今日のように「美德」として語られ続けるのであろうか。それは「自分を犠牲にしてでも正義を貫こうとする困難な行為であり、簡単に真似することのできないもの」と認識されており、「正義を遂行できない自分達」とは異なる素晴らしい行為者とその行為に対し、賞賛が贈られるのだと思われる。またその精神性は過去から現在に至るまで、日本人として賛美されるべきものとして教育されてきた結果なのかもしれない。

とはいえ今日では「個」が重視され、主体性のある行動と、自分を大切にする行動の双方が強く求められている。個人の適正な利益を抑圧する行為は必ずしも「良い」ものとしては評価されない。特定個人を社会的に追いこみ、個人の利益が蔑ろにされ、他の人々の利益だけが追求される状況は不平等であり、それは決して満足な解決に至ることはない。共に利益が追求可能な方策を、一義的に検討される時代なのかもしれない。それでも自己犠牲的行為が求められるような状況下では、その行為者の努力が無駄にならないよう、行為者自身が自己犠牲的行為を遂行しうる力量を持っているのか、そして自分が置かれている状況に流される形で判断していないか、その判断が適切かどうかなどを入念に確認しなければならない。

またアンパンマンが自身の頭を取り分け、お腹を空かせた子どもたちに振る舞う行為は、我が国では自己犠牲的と認識され、子どもたちにも親しまれる正しい行為と考えられている。しかしこの行為が一種のカニバリズムとして認識され、拒絶される文化圏もあるという(檜垣, 2018)。つまり自己犠牲的行為には、その行為内容も含めて、周囲の環境がそれを受け入れ可能な素地があって初めて成立するものと言える。周りに評価をされず、

行為者自身だけが納得する自己犠牲的行為は「偽善」であり、「エゴ」,
「自虐的」と評価される可能性がある。そのため、メリットを最大化する
方策を検討し、それを確実なものにする準備を徹底することが必要だと考
えられた。

文 献

- 赤星政尚編・永井豪&ダイナミックプロ 1999 デビルマン解体新書 講談社
安藤香織 2002 環境ボランティアは自己犠牲的か—活動参加への動機づけ 質
的心理学研究, 1(1), 129-142.
東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保 1991 心理用語の基礎知識 有斐閣ブックス
吾峠呼世晴 2017 鬼滅の刃(8) 集英社
蜂巢敦 1993 デビルマン論 風塵社
榎垣立哉 2018 食べることの哲学(教養みらい選書) 世界思想社
廣野行雄 2015 なぜ大石が大星なのか:『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』 駿
河台大学論叢, 51, 13-20.
飯田つとむ監督・永井豪原作 2003 デビルマン OVA コレクション 講談社
J. ボウルビィ 1981 「母子関係の理論」 岩崎学術出版社
川谷茂樹 2007 エゴイズムと自己犠牲: ニーチェの利他主義批判の倫理的意
義 北海学園大学学園論集, 132, A1-A23.
キャロル・ギリガン 1986 『もうひとつの声』 川島書店
宮内寿子 2010 ケアの倫理における自己犠牲の価値 筑波学院大学紀要, 5,
93-104.
新渡戸稲造著・岬龍一郎訳 2005 いま、拠って立つべき“日本の精神” 武士道
PHP 文庫
永井豪原作 2002 デビルマン DVDBOX 東映
永井豪&ダイナミックプロ 1987 デビルマン豪華愛蔵版(1) 講談社
永井豪&ダイナミックプロ 2019 激マン! デビルマンの章(中) 日本文芸社
永井豪&ダイナミックプロ監修 2015 完全保存版デビルマン大解剖 三栄書房
永井豪&ダイナミックプロ 2018 デビルマン The First(1) 小学館
永井豪&ダイナミックプロ 2015 デビルマンサーガ(1) 講談社
永井豪・ダイナミックプロ 1997 デビルマンレディ(1) 講談社
永井豪原著・南条竹則とデーモン一族編 2004 デビルマンの悪魔学—悪魔聖誕
— ジャイブ
永井豪 1997 デビルマン1(講談社漫画文庫) 講談社
永井豪 1997 デビルマン2(講談社漫画文庫) 講談社

- 永井豪 1997 デビルマン4 (講談社漫画文庫) 講談社
- 永井豪 1997 デビルマン5 (講談社漫画文庫) 講談社
- 永井豪 1999 ネオデビルマン1 (モーニングデラックス) 講談社
- 永井豪・ダイナミックプロ 1994 デビルマン1 (完全復刻版) (KC デラックス)
講談社
- 尾田栄一郎 2010 ONE PIECE(59) 集英社
- 斎藤富由起・吉森丹衣子・守谷賢二・吉田梨乃・小野淳 2012 青年期における
見捨てられ不安尺開発の試み その1—社会構造の変化を重視して— 千里金
蘭大学紀要, 9, 13-20.
- 杉山佳菜子 2017 女子青年の自己犠牲・自己優先と扶養意識 鈴鹿大学短期大
学部紀要, 37, 135-146.
- 高田明典 2004 『デビルマン』の物語分析—愛と憎悪の「神話」— 別冊
DIVA 甦るデビルマン 夏目書房, 138-149.
- 竹下健一監督・永井豪原作 2002 AMON デビルマン黙示録 (DVD 作品)
SME・ビジュアルワークス
- 田村均 1997 自己犠牲の倫理的的分析 名古屋大学文学部研究論集, 哲学, 43,
37-64.
- 田村均 2010 自己犠牲的行為の説明—行為の演技論的分析への序論— 哲学,
61, 261-276.
- 鳥山明 1994 ドラゴンボール(39) 集英社
- 梅垣明美・友添秀則 2002 Sportsmanship の解釈に関する研究 体育・スポー
ツ哲学研究, 24(1), 13-23.
- 浦山珠夫と光輝堂編 1998 世紀末デビルマン読本 コアラブックス
- 山田正紀 1997 デビルマン4 (講談社漫画文庫) 講談社
- 山本佳祐・池上知子 2020 人は自己犠牲が伴う援助をどのようにみているのか
—賞賛獲得欲求による調整効果— 日本心理学会大会発表論文集, 日本心理
学会第84回大会, PI-018.
- やなせたかし 1975 それいけ! アンパンマン フレーベルの絵本9
- 湯浅政明監督・永井豪原作 2018 DEVILMAN crybaby アニプレックス

Contemporary Self-Sacrifice Considered from the Manga Version of ‘Devilman’: Application to the Evaluation of a Self-Sacrificing Behavior in the Bullying Problem

UEMATSU, Koichi

Abstract

This study examined self-sacrifice as seen from the manga version of “Devilman.” In this version, Fudo Akira, the protagonist, shows the self-sacrifice of uniting himself with the devil, abandoning his life as a human being, and becoming a demon to protect humanity. The behaviors are summarized based on previous studies, particularly from two perspectives: a moral and ethical perspective and a psychological perspective.

As a result, self-sacrificing behaviors were summarized into the following five points: (1) the desire to maximize the merits and the ambivalence of the behavior, (2) uncertainty of the value of the behavior, (3) compulsive and passive nature of the behavior, and the existence of conflict situations, (4) the long-term and short-term perspectives of the behavior, and the possibility of over-adaptability of the behavior, and (5) the differences in the subjects who receive the benefits. Specifically, point (3), “the compulsive and passive nature of the behavior and the existence of conflict situations,” questions the “subjectivity and self-will” of self-sacrificing behavior that was a premise in many studies to date.

In addition, the self-sacrificing behavior in contemporary bullying problems was examined based on the summarized content. In this paper, we discuss how to evaluate self-sacrificing behaviors based on fictitious cases of bullying that we often hear of in modern society. To evaluate self-sacrificing behaviors as “virtues” is a poor approach, and to evaluate them as great acts, one must have (1) a stable living environment around the self-sacrificing person and personal stability, (2) mental toughness to take risks, (3) the ability to determine the balance between merits and demerits and (4)

understand the uncertainty of the value of the behavior. Otherwise, the self-sacrificing person per se may be exposed to risks or be criticized by others. In addition, we also discussed whether such persons have the foundation for such behavior to be accepted by those around them, which is important for conduction of such behavior.